

「望み、喜び、誇りの冠」

ピリピ 3:20-4:1

【1】序

I テサロニケ 2:19-20 にはピリピ人への手紙と同様に信仰者について語られている。「私たちの望み、喜び、誇りの冠となる」と。これは主イエスを信頼し愛する者に与えられた栄光の約束である。

今日は召天者記念礼拝。かつてこの教会の中で関わりをいただいた信仰者たちを覚えながらこのときを過ごす。そして、ここに集う私達もこの神の約束を共に確信したく願う。

【2】人の死について

それにしても、人の死というものは私達にとって絶望的である。死を前にして私達は誰しも無力であるからである。パウロはこの死について「最後の敵」とも呼んでいる。人は必ず死ぬべきものだということは生物学的には当然なこと、自然なことである。しかし、個別の死がやってくる時それは当たり前ではなく、不自然なものとなる。

【3】国籍は天にあり

ピリピ書を記したパウロはその生涯において多くの苦勞を積み重ね、信仰のゆえの苦しみを味わった。キリストのゆえに、その命さえも失ったのである。彼は、この世に望みをおいていなかったもので、耐えることができた。この世界で懸命に生きながらもその存在そのもののあるべき場所は天にあったのである。彼の望みは主イエス・キリストがおられる天にあった。彼はいつもそこを見つめ、目指して生きていたのである。

【4】キリストとは

彼が信頼したキリストとは何者であったのか。彼は33年の生涯の終わりに十字架で死なれたお方である。このことはキリスト誕生の700年以上前に預言されていたことであった。「彼は私たちの病を負い、私たちの痛みを担った」(イザヤ 53:4)と。神は全く罪の無いお方を、人類の代表者として裁き、すべての人の罪を肩代わりさせたのである。

私たちの破綻した人生、いのちはこの方によって救われるのである。けれども、私たちは思うかもしれない「神がいるならどうして?」と。しかし、神は遠くから人間に正論を持って迫るお方ではない。神は人の痛み、苦しみに寄り添ってくださった。その最大の現れが十字架である。

【5】栄光の約束

私たちすべての者は罪のゆえに死を待ち、神の正しい裁きに服さなければならぬ一人ひとりである。ところが神は、私達はこの永遠の滅びから救おうとされた。私たちの死の痛みを寄り添ってくださった。神はご自身の愛のゆえに、尊い神のひとり子イエスにこの裁きを負わせられたのである。神の正しい怒りはイエスに注がれ、その愛のゆえに私たちは救われたのである。この出来事に信頼して神を愛する者にはキリストが死に勝利した復活の永遠の命が与えられるのである。これが神の約束である。

イエス・キリストを信じ、彼を愛する者たちにはもうすでにこの栄光をいただいで生きるのである。こうしなければならない、という自分の思いや評価を超えた神の約束が今私たちを支えるのである。